

福島県で確認されたカラドジョウ

稲葉 修

南相馬市博物館・阿武隈淡水動物研究会

はじめに

1986年より行っている福島県内の淡水魚類調査において2007年10月までに35科105種を超える魚種を確認した。このなかにはウケクチウグイやゼニタナゴ、シナイモツゴなどの希少種もみられた。福島県は太平洋側流入河川と日本海側流入河川とで魚類相に違いがあり、淡水魚類の研究上、興味深い地域である。しかしながら、調査を始めた1986年には、既に様々な外来魚種が定着しており、現在までに23種類の国内外の外来種を確認した。今回は、このうち県内で分布を拡大しつつあるカラドジョウ *Misgurnus mizolepis* の現状について簡単に報告する。

カラドジョウは中国や朝鮮半島が原産のドジョウで、全長は18cmほど。国内に自然分布するドジョウに似ており、口ヒゲが5対10本であることはドジョウと同じであるが、本種のほうが口ヒゲが長く体高が高い、尾柄部が太いなどの違いがある(図1)。近年、国内各地の研究者から生息情報があり、それらの情報によると、東北地方各地からも確認されているようである。鮮魚店やスーパーなどでは、食用として販売されていることがある。

福島県内での確認状況

筆者は1986年より福島県内のドジョウ類の調査を行ってきたが、県内で初めてカラドジョウを確認したのは2002年9月24日で、郡山市西田町にある阿武隈川支流の天神川から多数の成魚と幼魚を確認した(翌2003年6月17日にも同地点にて多数確認)。2003年には南相馬市原町区(旧原町市)の新田川支流の水無川と北川からもそれぞれ10尾前後の成魚を確認し、翌2004年以降は、毎年多数の成魚と幼魚が確認されるようになった。



図1. ドジョウ(飯館村・新田川水系)(左)とカラドジョウ(南相馬市・新田川水系)(右)。

これ以後、調査の際にはドジョウ類に注意しながら同定を行っていったところ、会津地方（阿賀野川（阿賀川）水系）を除き、阿武隈川水系と浜通り北部の中小河川からカラドジョウを確認した。特に阿武隈川水系では、上流部の白河市（南湖と谷津田川水源の水路含む）から県内下流側の伊達市梁川町（旧梁川町）までの長い流路区間内とその間の支流から確認した。宮城県側の丸森町においても2001年に確認していることから、阿武隈川では水系全体に分布を広げている可能性も考えられる。また、幼魚の確認個体数も各確認地で多いことから、旺盛に繁殖している可能性が強い。浜通り地方の河川においては、相馬市宇多川、南相馬市原町区の新田川と太田川、同市小高区の水路、浪江町の請戸川流域の水路などから多くの成魚・幼魚を採集した（図2）。福島県内の確認地点の多くは河川や水路であった。南相馬市の河川では、水深や流速に関係なく、春季から秋季は平瀬や淵、冬季は淵にて確認した。また、福島県内の生息地点の底質は砂礫底から泥底までと様々であった。

在来種との関連、影響について

カラドジョウが在来の生物に対してどのような影響があるのかについては、まだよくわかっていない。しかし、南相馬市の北川や水無川では、両河川にて初確認した2003年以降、年々カラドジョウの個体数は増加しており、それとともに在来種のドジョウが年々減少している（稲葉 2005）。また、同市小高区の海岸線近くの用水路では、1990年代に数多くみられたドジョウは現在ほとんど確認できない。この水

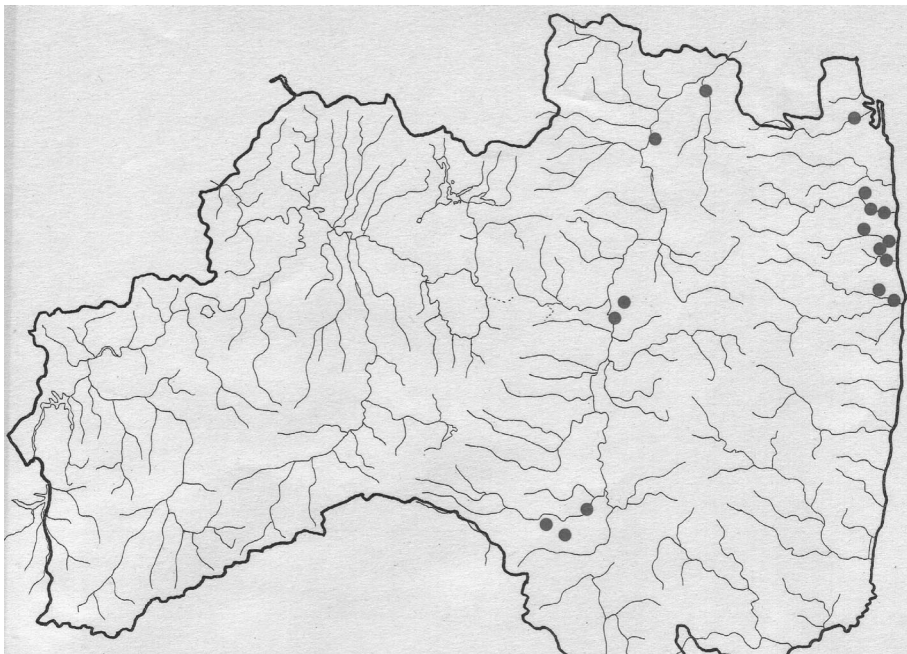


図2. 2007年10月までに福島県内でカラドジョウを確認した地点（稲葉 未発表）。なお、県内で初めて確認されたのは2002年である。

路では、2005年に無作為に100尾のドジョウ類を採集し調べたところ、100尾中98尾がカラドジョウであり、在来種のドジョウは2尾しか確認できなかった。これらの生息地では水質を含めた急激な環境改変はなく、オオクチバスなど魚食性の魚種の侵入もない。これらのことから、因果関係がはっきりと解明されていないものの、カラドジョウは在来種のドジョウに対して何らかの影響を与えている可能性が考えられた。今後、県内の分布調査を継続し、ドジョウ等在来種との関連についても調べていくとともに、駆除を検討する必要がある。

引用文献

稲葉修（2005）淡水魚類.（原町市教育委員会文化財課市史編纂室編）原町市史 8 巻特別編 I 自然. 原町市, 原町, pp. 692-749.